

# ミルズ知識社会学再考：序説的素描

## —「アメリカ的なもの」と「サブカルチャー的なもの」 と知識社会学—

伊奈 正人

### 1. はじめに

本稿のモチーフは、河村望氏から、秋元律郎氏の近著『知識社会学と現代——K・マンハイム研究』[1999] をめぐり、貴重な問題提起をしていただいたことである。(1) この著作は、在外研究で収集した一次資料を駆使した労作である。マンハイムの学問を吟味し、そして彼が提起した知識社会学のコンテクストとその現代的展開を解明している。河村望氏は、この著作を引きながら、ミルズに対するマンハイム知識社会学の影響を強調された。これは、ミルズ知識社会学のアメリカ的本質を重視していた筆者の立論(伊奈 [1991/1999]) に根本的な見直しを迫る問いかけを含んでいた。

こうした問いかけを吟味し、ミルズ知識社会学再考の一步とすることが、本稿の課題である。ミルズ知識社会学論としては、伊奈 [1982] (但し未公刊) と一次資料的にはあまり変化がないし、伊奈 [1991/1999] と若干重複する論点もあるが、その後の二次文献サーベイや、別途行ったサブカルチャー研究の成果も踏まえ、新たな切り口から再考を行う。とりわけ重視したいのが、アメリカン・サブカルチャーのバリアフリーな本質と、知識社会学のコンテクストとの連関である。この二つに緊密なつながりがあるということが、本稿の眼目をなす仮説的論点である。これは、マンハイム知識社会学の受け皿となった、ミルズ知識社会学のコンテクストを整理する作業となる。

以下では第一に、議論の前提となる知識社会学のコンテクストの吟味を行う。具体的には、筆者のミルズ研究と、秋元氏の著作をつきあわせ、ミルズ知識社会学における「アメリカ的なもの」と「サブカルチャー的なもの」の連関という論点を析出する。第二に、「アメリカ的なもの」に焦点を当てて、この論点を具体的に検討する。題材としては、テキサス大学入学以前のミルズの「ハイブリッド」な自己形成

過程、そこにおける社会学的想像力の問題——つまりは history と biography の交錯——を再吟味する。第三に、「サブカルチャー的なもの」に焦点をあてて、上記論点の考察を行う。ミルズの知識社会学思想が受容されたコンテクストは、対抗文化である。それと「バリアフリーなサブカルチャー」との連関を吟味する。最後に三つの論点の接点について結論的論及を行いたい。

## 2. 知識社会学のコンテクストをめぐって

筆者がこれまで展開してきたミルズ論は、彼の知識社会学の (a) アメリカ的本質と (b) 思想的・一貫性という二点を強調するものであった。すなわち、(a) ミルズ思想形成を考察する場合、プラグマティズムやアメリカ社会学の影響を重視すべきであること。そして、(b) その思想的な核心は、初期の理論的な仕事から、晩年のジャーナリスティックな活動まで一貫していること。この二点を強調した。立論のねらいは、ヨーロッパの社会科学の影響とそれによる思想的・政治的変貌を強調するそれまでの定説（たとえば Aptheker [1960]）に対する反論を試みることである。そして、反論の意図は、「社会制御」(social control)、「状況定義」などを鍵概念を提起したアメリカ社会学の「柔軟性」を読み解こうとすることであった。ミルズにおける知識社会学は、このような「柔軟性」をアメリカ的パラダイムとして具現するものである。これが、筆者の立論の要諦である。

河村氏の問題提起は、二つの点で「ミルズ知識社会学のアメリカ的本質」という立論に反省を迫るものであった。一つは、アメリカの知識社会学のコンテクストは、マンハイムによって与えられているということである。秋元氏は、ワースとマンハイムの往復書簡などの資料に基づき、事実関係をほぼ解明している。そして、ワース、さらにはミルズやマートンらのアメリカ知識社会学に対してマンハイムが及ぼした影響を明らかにしている。筆者もこの論点を議論する必要性に関しては、自覚していなかったわけではない。しかし、アメリカの社会学は、大衆社会論が提起した問題を受けとめ、独自の処方を探したというコンテクストを理論的に考察したのにとどまる（伊奈 [1991 : 122-146]）。知識社会学の問題としては、資料的な手だてがなく、留保せざるをえなかった。定説のヨーロッパ本質論も、筆者のアメリカ本質論も、おおざっぱな議論であることに変わりはない。これに対し、秋元氏は、問題を知識社会学に特化して、アメリカにおけるマンハイム的なコンテクストの受容について、厳密な資料批判による事実の解明を対置したかたちになってい

る。

もう一つの問題は、秋元氏が、ドイツ社会学とマンハイムの確執を跡づけていることと関わる。河村氏は、いくつかの論点のなかでも、アルフレート・ウェーバーが、ハンガリー生まれのユダヤ人マンハイムを嫌悪していたという事実を強調された。たしかにそこには、知識社会学というコンテクストの本質的な一断面がある。知識社会学は、前世紀転換期における一連のパラダイム転換——すなわち価値の相対化、素朴な実在論への懐疑、無意識・非合理的なもの・身体性の発見等々——と関わる。秋元氏の議論、そしてそれを受けた河村氏の問題提起は、マンハイム的なコンテクスト、良知力氏 [1978] のことばを借りれば「向こう岸からの世界史」というコンテクスト——したがってマルクス的なコンテクスト——を示唆している。

この二点、すなわちアメリカ知識社会学のコンテクストと、マンハイム知識社会学のコンテクストとの連関について考えるのが、ここでの課題である。さて、そこで「ミルズ知識社会学のアメリカ的本質」を焦点として考える場合、どのような問題が析出されるか。秋元氏の著作によりながら、このことを次に考えよう。

秋元氏は、アメリカ知識社会学のコンテクストを、マンハイム知識社会学の移植によって開示されたものであることを論証した(秋元 [1999: 268-291])。アメリカ的な独自性としては、知識社会学の経験科学的なつくりかえを目指した点があげられている。こうしたコンテクストのなかでミルズは、マートンとは異なる位置づけを与えられている(秋元 [1999: 284])。なぜなら、ミルズが、知識社会学を経験科学としてつくりかえることとともに、——経験科学の台頭を含む——現代の思想状況への方法論的な反省を重視し、そこにおける知識社会学の役割を強調したからである(Mills [1939/1940])。ミルズが知識社会学の経験科学化を目指したことはたしかであるが、それはまた自省的方法論の構築を目指すものであった。換言すれば、ミルズは、プラグマティズムやアメリカの経験科学を、知識社会学の方法論でつくりかえようとしていたとも言えるのである。

秋元氏は、この論点について、次のように言っている。ミルズの「とらわれないインテリ」としての立場が「マンハイムの理念にたいする深い共感にささえられていたことは疑いえない。そしてそこにこそ、イデオロギーの対立が激しく科学的認識を襲う時代に生きねばならなかった社会学者として、その宿命を厳粛に受けとめ、自由の意志をつらぬこうとした一人の知識人の姿勢があった。深くアメリカのプラグマティズムの思想に基盤をおいたミルズは、これを知識社会学の方法論をくぐりぬけることによって、わがものにしていったと言ってよい」(秋元 [1999: 284

-285])。

秋元氏の立論は、結果として知識社会学のアメリカ化＝経験科学化という単純な筆者の議論<sup>(2)</sup>に、微妙なニュアンスの相違を識別した緻密な立論を対置したかたちになっている。言うまでもなく、こうした立論に反論の必要は感じない。秋元氏によるマンハイムの重要性の強調は、厳密な資料論的根拠を持ち、択一的な俗論を越えた説得力を持っている。

ここで注目したいのは、秋元氏が同じ論脈でホロビッツ (Horowitz [1963]) の議論に着目していることである。「ホロビッツは、ミルズほどマンハイムの非イデオロギー的な政治社会学にたいする信念を真摯に考えたものはいなかったと伝えている。そしてミルズのキビキビとしたつよい独立的な政治的立場は、たまたま彼がテキサス生まれであり、プラグマティズムを信奉していたためだという」(秋元 [1999: 284])。秋元氏は、マンハイム知識社会学に対するミルズの共感を、テキサス気質で根拠づける立論には、判断の保留を行っている。

ここで踏み込んで検討してみたいのが、この保留された論点である。ミルズ研究の第一人者ホロビッツは、マンハイムの重要性を再三強調してきた (Horowitz [1983]、高橋 [1979])。そのホロビッツが、言及しているミルズのテキサス気質を、コンテクストとして検討すること。そこからミルズ自身の社会学的想像力——つまりは history と biography の交錯——の諸契機を吟味すること。これが次の課題となる。そのことで、テキサス気質というアメリカン・サブカルチャーのコンテクストが、そしてミルズにおける「アメリカ的なもの」が、どのような意味でマンハイム知識社会学の受け皿たりえたのかを考察してゆきたい。

### 3. ミルズにおける「アメリカ的なもの」のコンテクスト ——ハイブリッドな本質——

#### (1) ミルズの自己形成と社会学的想像力

さてここで、「アメリカ的なもの」に関する議論の焦点は、テキサス気質にある。それを分析するとなると、テキサス時代のミルズについて検討することが不可避となる。ミルズについてクロノロジカルな分析をした研究は数多い。<sup>(3)</sup> そのなかで、幼少から大学学部時代までを詳細に分析した研究は、ギラムの修士論文 (Gillam [1966]) のみである。<sup>(4)</sup> 主としてこの論文に基づきながら、適宜資料を追補して、ミルズにおける思春期の自己形成について見てゆくことにしたい。

検討の仮説は、次のとおりである。ミルズ自身の個人史 (biography) とアメリカの歴史 (history) を契機として、『ホワイトカラー』他の著作が構想され、その構想力の自覚化として、『社会学的想像力』という方法論が自覚化された。

## (2) ミルズの出自——自己形成の契機としての父と祖父

C・ライト・ミルズは、1916年にテキサスのウェィコーで生まれた。湖の町としても知られるウェィコーは、ダラスから南へ150kmあまり、ブラズス川の流れる「田舎町」であった。父チャールズ・グローバー・ミルズ (Charles Grover Mills: 通称C.G.)、母フランシス・ミルズ (Frances Mills)、家系はイングリッシュ・アイリッシュ<sup>(5)</sup> であった。

父C.G.は、保険の代理人 (insurance agent) であった。父は、文字通りのホワイトカラーであった。仕事の性格上旅から旅への生活であったという。ミルズは後に次のように語っている。「私は10歳の時から『ホワイトカラー』を書いていると言ってもよい。私は常に次の旅への準備のできている父を見てきた」<sup>(6)</sup>。両親は、ミルズをひとかどのものにしようと熱心に教育した。ミルズは、両親の「欲求不満が投影される (projected) 対象」であり、そうした両親の「過度の甘やかしのなかで育ったと言える」。<sup>(7)</sup>

こうしたホワイトカラーの父とともに、ミルズの自己形成にとって重要な存在であったのが、母方の祖父ブラクストン・ブラッグ・ライト (Braxton Brag Wright) である。彼は、産業主義も、ポピュリズムの嵐も、まだフロンティアに届く前に、フランス系カナダ人の妻エリザベス (Elizabeth Gallagher Wright) とともに、「南から」(Gillam [1966: 9-10]) テキサスに入植した。牧場を開拓し、カウボーイとしての生活を始めた。独立心と気性の激しさをもった典型的なテキサス人であり、ライフルで背後から撃たれて死んだ。<sup>(8)</sup>

ミルズのアルバムには、黒いカウボーイハットに、ジャケットを無造作にひっかけた、屈強な大男を写した写真が載っている (Gillam [1966: 10] 典拠は *Tovarich five* [a-f])。この祖父の姿、それにまつわる思い出は、後々までテキサス人ミルズの誇りであり、好んでメリーランドやニューヨークの友人たちに話して聞かせたところのものである (Coser [1962]、Gillam [1966: 11])。

## (3) 反抗と癒し——自己形成の契機としての大都会と田舎町

少年時代のミルズは、傷つきやすい、感受性の強い子供であった。芸術への関心

を持つ一方、一人で機械いじりをしているのが好きな子供であった。母フランシスはそう回想している (Gillam [1966 : 16] 典拠は “Biography”)。

順調に成長していたミルズであるが、1923年に父C.G.の転勤で大都市フォートワースに引っ越してから、変調をきたす。ミルズはそこでのクラスにとけ込めず、ひどい孤独を味わうこととなる。ミルズの精神は不安定なものとなり、その性格も反抗的なものになっていった。学校では、自分が納得しないかぎりテコでも動かないという反抗的な態度のため、たちまち問題児になった。そして、たびたび学校への登校を拒否した。<sup>(9)</sup>

このようなふるまいは1924年に小都市シャーマンに移り住んでからもしばしばくりかえされた。しかし、ミルズはここで通っていたカトリック教会で、支えとなってくれる二人の人物と出会う。一人は、いっしょに教会に通っていた年長の友ジム・ローチである。そして、もう一人が教会の司祭アラードである。ミルズはジムとともに、教会活動を手伝う役割 (alter boy) をにない、司祭を助けた (Gillam [1966 : 17f.f.] 典拠は “Biography” part2)。ミルズのカトリック信仰と教会活動の熱心さは、この教会で学んだラテン語を終生忘れることがなかったことからもうかがえる (Swados [1963])。

このカトリック教会に集まってくるのは、メキシコ人の貧しい下層階級の人々がほとんどであった。ジムとミルズは、そうした人々と交流したわけである。そこで経験は、ミルズを社会学に向かわせるのに、決定的役割を果たしたと、ハワード・プレスは述べている (Press [1978 : 14])。

シャーマンのカトリック教会で、ミルズは、精神的安定を回復した。しかし、1928年ダラスに移ってから、フォートワース時代にも増して、不幸な境遇におかれることになる。彼は、大都市になじめず、級友や教師たちに反抗的な態度をとった。彼はまた問題児のレッテルを貼られることになる (Gillam [1966 : 22] 典拠は “Biography”)。

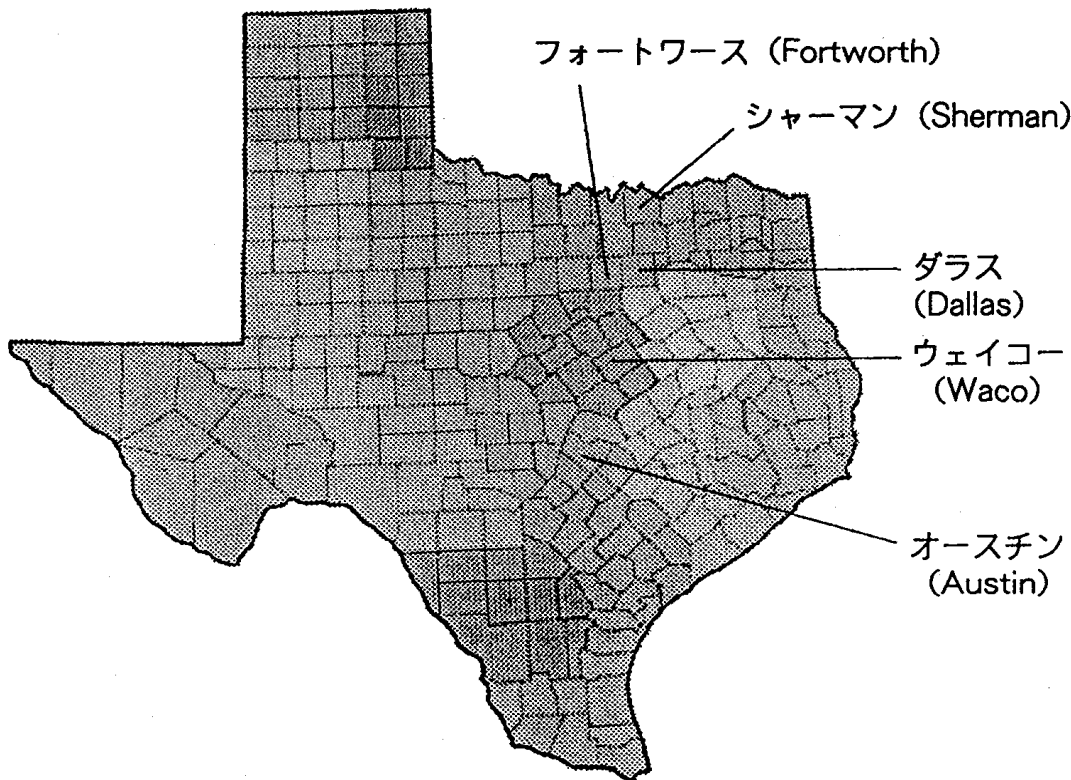
ダラスは、テキサス最大級の大都市であった。テキサスにおける産業振興の中心をになう都市であり、1910年から1930年までの間に人口は二倍以上になっている (表 : US Bureau of Census [1910/1920/1930])。フォートワースも同様の発展を遂げている。ウェイコーも人口倍増しているが、人口は一桁違う。シャーマンは微増にとどまっている。

こうした人口の増大は、アメリカ全土の産業振興、経済発展と深く関わっている。農業、工業、商業が飛躍的に発展してゆき、地域経済は国民経済へと統合されてゆ

表：ミルズ居住都市の人口変化

	ミルズの居住期間	1910年	1920年	1930年
ウェイコー	1916～1923年	26,425人	38,500人	52,548人
フォートワース	1923～1924年	73,312人	106,482人	163,447人
シャーマン	1924～1928年	12,412人	15,031人	15,713人
ダラス	1928～1934年	92,104人	158,976人	260,475人

(US Bureau of Census [1910/1920/1930] より作成)



図：テキサス全図とミルズ居住都市

く。「ビジネスの論理」(salesmanship) がその発展の飛躍を支え、新しいシステムが形成される。「消費者の生産」——つまりはニーズの開発による需要創出——によって人間の「制作本能」(workmanship: Veblen [1914]) や、健全な産業の論理が阻害される。ソースタイン・ヴェブレンは社会変動の本質をそう批判した (Veblen [1923: 251-287])。また、リンド夫妻は、アメリカの典型的な中都市マンシーで調査を行い、全国的な文化変動のなかで、コミュニティに「マネーの論理」が

貫徹して、社会統合の論理が新たに作り上げられてゆくさまを考察した (Lynds [1929/1937])。一つ星の星条旗を国旗とし独立宣言した歴史を持つテキサスも、こうした文化変動、社会変動に飲み込まれていたと言ってよいであろう。ミルズがこうした時代に、テキサス各地を転々としながら、自己形成を行った。それは、後にヴェブレンやリンドを学んでゆく素地となったと言えるであろう。

#### (4) 「職人性」——ダラス・テクニカル・ハイスクールとテキサス A & M

さて、ミルズは、再び問題児の烙印をおされた。しかし、思春期を迎えたミルズは、それに負けることなく、独立心を磨き、「しっかりとした自分」を作り上げていった (Gillam [1966: 22] 典拠は “Biography”)。その核となったのが、大工仕事である。母フランシスの回想によれば、ミルズはボート、家具、室内装飾などを熱心につくり、それらはどれも彼の生来の職人的センス (craftsmanship) を証明するできばえだったという (Gillam [1966: 23] 典拠は “Biography”)。

そして1930年、ミルズは、ダラス・ハイスクールへ進学することになる。そこで彼は、「工芸および建築」の教師ブロックと出会う。ブロックは、ミルズの入学後、ダラスのテクニカル・ハイスクールに職場を変えてしまう。ミルズは、何人かの学生とともに、後を追って転校した。これは、ブロックの人望をあらわすとともに、ミルズ自身の学ぶ意欲をよくあらわしている。そして、ミルズはそこで自らの職人的才能 (gift for craftsmanship) に磨きをかけることになる (Gillam [1966: 24] 典拠は “Biography” part3)。

他方、ミルズは、そのデリカシーにマッチした美術や文学にも関心を示し、読書や詩作にはげむなど、広い関心を示したと母フランシスは回想している。そうした親らしいいくつかの回想のなかで、「南への旅」の話は注目される。父C.G.の故郷フロリダへの家族旅行である。それは、両親の出自の軌跡をたどる旅でもあった。そして、その旅を通して、カトリック教会とも決別して、独立に自己を形成してゆく自分を、ミルズは発見した。母フランシスはたびたび叱ったそうであるが、ミルズはまったく教会に行かなくなったという (Gillam [1966: 24-26])。<sup>(10)</sup>

ミルズの知性や感性、そして独立心は、テクニカル・ハイスクールで異彩を放つものであった。級友の一人は「私たちの誰もが、ミルズを友と呼べることに誇りを感じる」と語っている。<sup>(11)</sup> ただし、ミルズは卒業時に「首席」ではなかった。母フランシスは、このことにはかなりのこだわりを持っていて、後に自慢の息子の言い分を回想している (Gillam [1966: 24-25] 典拠は “Biography” part3)。ミルズ



の言い訳は「(首席でなかったのは：補伊奈) それをのぞまないからです。首席になるのは大学へ行くまで待つて欲しい」というものであったようである。

またミルズ自身も、この事実を回想していて、「新しく学ぶことは何もなかった」と晩年自伝的ペーパーに書き記している (Gillam [1966 : 24-25] 典拠は *Tovarich Five* p8)。後に1939年修士号を得てテキサス大学修了するにあたり、ファイ・ベータ・カップに選ばれることで、母への約束を果たすことになる。しかし、この時は、母や学生結婚した妻が反対したにもかかわらず辞退している。会の「形式的伝統」を嫌ってのことである。「形式的伝統」の質にミルズは激怒し、投函されこそしなかったが、会に対する批判の手紙を書いた。ミルズは、終生変わらず十分に野心家であったが、少なくともこの会が保証する類の「サクセスストーリー」に対しては、アレルギーを示し、批判のまなざしを注いだことは、確認されてよいであろう (Gillam [1966 : 50-56])。

ハイスクールを出たあと、ミルズはテキサスA & Mに進学する。テキサスA & Mは、農業とミリタリズムというテキサスの地方色を強く打ち出した学校で、時代の進歩派 (progressive) を自認し、「紳士教育」を教育理念にかかげていた。<sup>(12)</sup> テキサスの地域産業振興の担い手であり、ホワイトカラーの父は、この学校に進学することを、ミルズに強くのぞんだ。また母は、ミルズが軍医になるということで賛成したという。いずれにしても、「職人性」をより一層のばすことが進学の動機づけであった (Gillam [1966 : 30] 典拠は interview to Yaroslava Mills)。

しかし、ミルズはここで再び不適應を起こす。規律は厳しく、学生や教員は、理性を失った「軍隊ロボット (military robot)」のようであったとミルズは回想している。ミルズは、『ホワイトカラー』で「陽気なロボット (cheerful robot)」というオキシモーロンを提示している。どちらの表現でも、ミルズは新しい産業国家アメリカの担い手をロボットにたとえていることになる。ミルズは、トラブルを繰り返した。レスリングの試合中相手にけがを負わせたときは、罰として「誰もミルズと口をきいてはいけない」ということになった。当時学生結婚した最初の妻は、ギラムのインタビューに答えてそう語っている (Gillam [1966 : 31])。公の決定として村八分になったという事実は、当時ミルズがおかれていた厳しい状況を雄弁に語っている。その結果、ミルズは神経症になってしまう。

ミルズを癒したのは読書であった。工芸、技術、文学、美術などの本とは別に、ミルズはG・H・ミードやC・H・クーリーの著作と出会う。神経症の自分と向かい合い、「自己分析」をするためにミルズは社会学書を読み始めた。そこから一つの決意

が生まれ、それをミルズはある手記に書きつけた。「私は社会学者である」(Gillam [1966:31-44])。こうして、ミルズは一年でテキサスA & Mを退学し、1935年テキサス大学オースティン校に入学することになった。

#### (5) ミルズにおける「テキサス気質」と「アメリカ的なもの」

以上の検討からもわかるように、たしかにミルズは独立に対する強い意志、ラフ・アンド・レディのケンカ早さ、キビキビした行動力などに代表される「テキサス気質」を受け継いでいた。そうした気質に深く影響され、ミルズの独立心、職人性、そしてデリカシーなどは形成されていった。時代背景は、大戦間の大変動の時代で、ミルズはうつりゆく (in transition) アメリカを目の当たりにした。

産業振興が行われ、ビジネスの論理がコミュニティの細部にまで浸透することで、新しい産業国家アメリカの統合が再編されていった。独立自営者は賃金労働者となり、農場・牧場からオフィスへ、人員の配置換えがなされてゆく。型にはまらない西部の英雄はいなくなり、規律正しいホワイトカラーが跋扈する。祖父と父、大都市と田舎町、職人的工芸と産業技術、テクニカル・ハイスクールとテキサスA & Mなどは、社会変動を象徴するイメージを与え、やがて『ホワイトカラー』ほかの作品が構想され、社会学的想像力という方法が自覚化されてゆくことになる。その一方の契機は、新しい産業国家のシステム形成であり、もう一方の契機は、それによって蹂躪された人間共同の可能態である。

「テキサス的なもの」にしても、「アメリカ的なもの」にしても、WASPが支配する伝統や、あるいは新しい産業国家に社会統合を与えるようなものには、一様に拒否反応が示されていることに注意したい。ミルズが重視したのは、そういった統合とは別様の論理で歴史を展開しえたかもしれない独立性、共同性、職人性、生活性、雑種性などであった。ここにミルズが知識社会学として展開してゆく反省性の一根拠を読みとることは重要であろう。そして、この諸々の性格が、ミルズにおける「テキサス的なもの」であり、「アメリカ的なもの」である。ミルズは、プラグマティズムを学んでゆく際も、その「柔軟性」と「反省性」に注目している(伊奈 [1999:165-195])。だからこそミルズは、プラグマティズムとマンハイム知識社会学の問題設定を方法論的に関連づけることも可能であった。実際ミルズは、プラグマティズムや社会学の方法論について経験科学的・知識社会的に問い続け、「社会学の社会学」の先駆者となった。また、アメリカの多元的な日常生活や政治構造に、権力のゼロサムモデルを突きつけて、挑発的な大衆社会論を展開した。カリブ

や東欧の民衆の声にも、耳を傾けることができた。これらの理由も、ミルズ自身が体現している「ハイブリッドなアメリカ像」を想起すれば、容易に理解されるであろう。(13) そして、そこには、知識社会学的モチーフが貫かれていた。

#### 4. 「バリアフリーなサブカルチャー」のコンテクスト

ミルズの知識社会学は、サブカルチャーとしての対抗文化を生み出したラディカリズムに大きな影響を与えた。アメリカの学生運動、公民権運動などを描いた『民主主義は路上にある』(Miller [1987]) という本には、そうした運動の理論的支柱であったミルズの写真が掲げられている。それは、ミルズが、黒いつなぎとサングラスで巨大なオートバイに乗っている写真である。アーバン・カウボーイを自称するミルズのスタイルは、まさにハイブリッドなものであった。最後にミルズにおける「アメリカ的なもの」のコンテクストと、それを受容した対抗文化のコンテクストとの接点について検討しよう。それは、また、ハイブリッドな知識社会学のコンテクストと「バリアフリーなサブカルチャー」との接点を提示する作業でもある。ここでは、黎明期のロックンロールのなかからエルヴィス・プレスリーをとりあげ、これを検討してゆく。(14)

黒人文化と白人文化が衝突して、一つの「ビックバン」がおこった。アイルランドのロックバンドU2のボノは、プレスリーを回想してそう言っている(Interview to Bono: R & R vol.2)。実際、プレスリーのパフォーマンスは、「白人の道徳」に真っ向から挑戦したものであった。全身をくねらせて、セクシャルな動作で歌うことは、「黒人的なもの」であり、「お下劣」なもので、およそ白人のすることではないというのが、当時の「常識」であった。この点、プレスリーは、完全に「カラー・ブラインド」であったと、サム・フィリップスは言っている。プレスリーには、白も黒も赤もなかった。そして、プレスリーはこうした「常識」にとらわれることなく、人種や音楽ジャンルのバリアをとりさり、「バリアフリーな音楽」をめざしたと言える(Interview to Sam Philips: R & R vol.2)。それは「白人の道徳」への挑戦でもあった。

実際、ミルトン・バールの番組にプレスリーが出たときには、「白人の道徳」を重んじる「常識家」たちから70万通もの「ファンレター」ならぬ「パンレター(苦情の手紙)」が寄せられた(Interview to Milton Berle: R & R vol.2)。そんなこともあり、「エド・サリバン・ショー」に出演したときは、胸から上しか映されなかつ

た。レーガンの思想や道徳を嫌ったことでも知られるロックミュージシャンのブルース・スプリングスティーンは、エルヴィスファンの母とその番組を見ていたという。スプリングスティーンは、「あれじゃギターを引く手が見えないわ」という母のことばを、回想して語っている。(Interview to Bruce Springsteen : R & R vol.2)。

1956年テレビの人気番組「スティーブ・アレン・ショー」にプレスリーが出演したときのエピソードは、さらに象徴的である。番組で司会のスティーブ・アレンは、生まれ変わった「ニュー・プレスリー」を皮肉な笑みを浮かべて紹介した。登場したプレスリーは、タキシードを着ていた。そして、獵犬を相手に「ハウンドドッグ」を歌った。ユーモアとウィットを交え、しかし、いささか冴えないパフォーマンスで、プレスリーはこの無体な要請にこたえた。「プレスリーはかなりむかついていた。撮り直しになっても彼は拒否しただろう」。プレスリーのドラマーをつとめていたD・J・フォンタナはそう言っている (Interview to D.J.Fontana : R & R vol.2)。

また、ギタリストをつとめたスコッティ・ムーアは、スティーブ・アレンがプレスリーに批判的であったと言っている (Interview to Scotty Moore : R & R vol.2)。スティーブ・アレンは、プレスリーを番組に出したくなかった。しかし、視聴率を考えしぶしぶ登場させた。苦肉の策が、「ニュー・プレスリー」の演出であったわけである。しかし、それは「バリアフルな独善」に基づいた的はずれの演出であった。ヒット曲「ハウンドドッグ」の原曲は、ビックママ＝ソールトンが歌っていたものである。ジゴロのひもを叩き出す歌で、「あんたはただのハウンドドッグ (= 女好き) よ」と啖呵をきる「猥雑なたくましさ」を歌ったものであった。1956年ラスベガスでプレスリーはこれを聴いて、なんのこだわりもなく持ち歌に採り入れた。口当たりよくアレンジされているが、底流に流れるソウルに変わりはない (Interview to Jerry Leiber : R & R vol.2)。

上でプレスリーの「バリアフリー」な本質を強調したサム・フィリップスは、1950年メンフィスにスタジオをつくり、黒人のR&Bアーティストや白人のカントリー歌手に活動の場をあたえた白人のプロデューサーである。そして、1952年フィリップスはサンレコードを設立し、R & Bやカントリーのレコードを制作した。フィリップスは、「黒人のように歌える白人歌手を見つけたら億万長者になれる」と考えていた。黒人音楽のレコードを手がけていたフィリップスは、白人の若者たちが隠れたところでそれに熱狂していることを知っていた。「このベールをはぎとっ

て爆発的なヒット商品にするためには、やはり白人のパフォーマーという“表層”が必要だった。そんな彼のスタジオに、ハイスクールを卒業したばかりのエルヴィス・プレスリーという青年がやってきたのは53年。彼はトラック運転手として得た初給料で自分のレコードを作り母親の誕生日プレゼントにしようと、フィリップスのスタジオへと出向き、4ドル出して古いバラード曲『マイハピネス』をレコーディングした。“黒人のように歌える白人”を探し求めていたサム・フィリップスのもとに、偶然にせよ、絶好の素材が現れたわけだ」。(15)

こうした「バリアフリーな文化」は、「ビッグヒット」「億万長者」「全米一」などの「サクセスストーリー」を随伴するものであった。レコード業界は、マスメディアとしてのラジオやテレビと結びつき、独特の商業主義的展開を見せてゆく。しかしまた、それが頑ななバリアに風穴をあけたことだけは確かである。さらにFM放送が、マイナーで、マニアックなもののチャンネルとして確立され、またコンサートスタイルが確立されてゆくことで、「バリアフリーなサブカルチャー」のチャンネルとスタイルが確立されてゆく(R & R vol.6)。そこで、ジミー・ヘンドリックス、ジャニス・ジョプリン、ジム・モリソン、キース・ムーンらが活躍し始めたときに、対抗文化は始動する。白人的なものから黒人的なものへ。記号論から身体論へ、前頭葉から全身感覚へ、理性から感性へとといった文化変動の受け皿となったのは、言うまでもなくベビーブーマー世代である。それはまた、プレスリーの音楽を聴いて、ハイブリッドな少年期、青年期をすごした者たちであった。

## 5. むすびにかえて

知識社会学の創始者であるマンハイム、それを「アメリカ的」に受容したミルズ、そのミルズの知識社会学を受容した世代の対抗文化をとりあげ、そのコンテクストを検討してきた。マンハイム、ミルズ、対抗文化はともに、「サブカルチャー的なもの」「ハイブリッドなもの」「バリアフリーなもの」に存在理由を与えられていた。これが、冒頭に示した三つの論点の接点である。(16)

行論を、ミルズ知識社会学のコンテクストということに集約して約言し、むすびにかえたい。従来筆者の立論において、マンハイムの問題設定のアメリカ的つくりかえ、つまりは知識社会学の経験科学化を、ミルズ知識社会学の本質として論定してきた。それは、「柔軟性」を焦点としたアメリカ社会科学の特長を際立たせるためであった。しかし、本稿では、マンハイムの問題設定にも、ミルズにおける「ア

メリカ的なもの」にも、そしてミルズを受容した受け皿としてのウッドストックジェネレーションにも、共通する一つのコンテクストがあることを示した。それは一言で言えば、バリアフルに「外部」をつくりだし、「つながり」「まとまり」「おさまり」をつけようとするアイデンティフィケーションへの批判である。こうしたバリアフリー志向のハイブリッドなスタイルは、「柔軟性」の持続的実現として読解可能なものであろう。そしてそれは、山之内靖氏が「総力戦体制」(山之内 [1996]) と呼ぶコンテクスト——それをになうシステム論的社会理論と社会調査法——に対する「向こう岸からの批判」をになうものであった。そのコンテクストは、まさにミルズが『社会学的想像力』ほか晩年の著作で激しく論難したところのものである。ここに、ミルズの生涯を貫く知識社会学的視点の重要性が確認される。これが、冒頭に示した、アメリカン・サブカルチャーのバリアフリーな本質と、知識社会学のコンテクストとの連関という仮説的論点への暫定的結論である。

注：

- (1) これ以下でてくる河村望氏の問題提起や議論のすべては、直接伺ったお話を、私なりに受けとめえた範囲で、解釈・記述したものである。
- (2) たとえば伊奈 [1982/1991] の立論は、これに比べれば単純すぎることは否めない。
- (3) なかでも、ホロビッツ (Horowitz [1983]) やティルマン (Tilman [1984]) などの大著は、書簡や手記などの一次資料を駆使して、伝記的事実や理論的影響関係をほぼ解明している。その他、1990年までのミルズ研究の動向に関しては、伊奈 [1991] 巻末の文献補注に詳述した。1991年以降の学説研究の動向としては、全体像というよりは、研究が分節され、特化した影響関係などが取り上げられる傾向があるように思われる。権力論、動機論など個別分野での研究の他に、いくつかディサテーションなどが確認される。紙数の関係で詳細は稿をあらためたい。
- (4) これは、修士論文ながら、遺族の所有していた書簡や手記などを駆使して事実が解明されており、ミルズ研究の古典とも言うべきものである。なおギラムの使用した資料は、1980年代になり、テキサス大学のテキサス歴史センターにコレクションとしてが収納された。
- (5) ミルズがイングリッシュ-アイリッシュのカトリックの家系であることは、

- Gerthの追悼文 [1962]、Pressの研究書 [1978] なども言及している。
- (6) Mills [1951b]。Gillam [1981] は、ミルズの代表作『ホワイトカラー』を分析して、個人史の自覚化をモチーフとしてミルズがそれを書いたことを解明している。
- (7) Mills [1951a: 30-31]。ミルズは自らの成長を自著で書いたことになる。あとでも引用するが、Gillam [1966/1981] に引用されている手紙類などの資料を見ると、「一番になること」や、ファイ・ベータ・カッパほかの「優等賞をとること」、「自著を出すこと」などの「サクセスストーリー」を親に提示する努力をミルズが行っていることがわかる。また、両親はこうした息子の成功を切望していたことを、ギラムは描いている。なお、母フランシスは “This is the History of the Youth of Our Son” dated March 29 1954 という息子の回想録を自ら執筆している (Gillam [1966: 11])。以下、ギラムの典拠を示すためにこの文献に言及する場合、ギラムにならって “Biography” と表記する。
- (8) Gillam [1966: 10]。ギラムはここでは、ミルズの手記風の書簡 C.Wright Mills, *Tovarich : Contacting the Enemy*. Unpublished work. の five [a]. を用いている。“five” とは書簡番号で、そこにアルファベットのページ (ここでは [a]) がふってある。ギラムの典拠を示すためにこの文献に言及する場合、ギラムにならって *Tovarich* と表記する。ギラムによれば、ミルズの記述はかなりショウアップされたものになっているという。
- (9) Gillam [1966: 16f.f.] (典拠は “Biography” part1)。ミルズがこのような行為に及んだ原因として、本来より年下のクラスに入れられたことがあるという (ギラムの典拠は、最後の配偶者 Yaroslava Mills へのインタビュー)。さらにもう一つの原因としては、ミルズがシャーマンやウェイコーのような小都市ではある程度適応したのに対し、大都市のフォートワースやダラスにはとけ込めなかったことも、事実として確認される。
- (10) *Tovarich* five と “Biography” part3 のほかに、ギラムは C.Wright Mills “Race Religion—Miscellaneous Opinions and Writings” という手記を典拠にしている。
- (11) Gillam [1966: 27-28]。ギラムが典拠としているのは次の資料。Evans and Smoot “Visits with Interesting Personalities Charles Mills” (Dallas Tech High School)。なおミルズは二度離婚している。その度に再婚し、結婚は三度。
- (12) Gillam [1966: 29]。ギラムの典拠は、大学の公式文書 *Bulletin of the*

*Agricultural and Mechanical College of Texas: Record of the Session 1933-1934; Announcements for the Session 1934-35 Fourth Series vol5* (April 1934) p30である。同大学で学ばれた都築忠七氏の談話によると、このあと出てくるミルズの論難は、洗練された同大学のイメージとはだいぶ異なる、したがってかなり偏見に満ちたものであるということである。

- (13) 伊奈 [1999: 166-167] より関連部分を引用しておく。「アメリカ人の誰もがカストロのキューバ革命に憎悪を燃やした時、ライト・ミルズはキューバ人を代弁するかたちで、『キューバの声』をアメリカに伝えようとした。その書物の題名が『聞けヤンキー (Listen Yankee)』(Mills [1960]) であることは興味深い。…… 翻訳者の鶴見俊輔は書物の題名を、『キューバの声』とし、文中では『ヤンキー』を『アメリカ人さん』と訳している。だから、ここに『南北対立』などを読み込むのは、ゆきすぎであろう。ただ、若い頃に『プエルトリカン・ジャーニー』(Mills et als [1950]) という調査報告をまとめているミルズが、アメリカの『サブカルチャー』となっている『カリブ的なもの』に、無関心であったはずもない。むしろ、そういう視点から、この激烈でエネルギッシュな『告発文』を書いたと考えた方が自然であり、また告発の内容も、……『サブカルチャーとしての地域文化』を愛する——『反共』『愛国』のキリスト教徒である——多くのアメリカ人の『心の琴線』にふれるような書き方がされている。ミルズの出身は、…… テキサス州である。隣接するルイジアナ州は、フランス系の文化が根付いており、『ケイジャン』であるという独特の文化が今なお根付いている。また、『クレオール』であるというような文化スタイルをはぐくんたのも、このカリブ湾岸地域である。こうしたエスニックな文化が混在する深南部は、人種差別の悪名があまりに高くなっているけれども、アメリカの『サブカルチャー』としての『カリブ海湾岸文化』ともいうべきものを形成していることも、見逃すことはできない。それは、各地の『コミュニティ』や『タウンシップ』などを浸食し州の境を超えながら、逆に州ごとの『地域色』を形成するまでになったものであることも重要な点であると思われる」。付言すれば、ミルズも応分の野心をもっていたし、そこそこにスノップだったことは、Gillam [1966/1981] もいろいろ示している。メリーランド大学に赴任したときに、「このままでは終わらない」と心に誓ったこと。バルザック文学に夢中になり、「人間喜劇」というコンセプトを『ホワイトカラー』で使った文学趣味。二番目の結婚相手ルース・ハーパーを口説く手紙で、「ボクって言葉に生きる人なんだ。ボクはバルザックさ」と書いてい



ること。もともとはカントリー音楽などのファンであったが、クラシックの教養には並々ならぬ関心を示したことなどなど。あくまでも、両義的存在としてミルズを見るのが本稿の立場である。

(14) 以下ロックに関するインタビューなどの典拠は、ビデオ資料 *The History of Rock 'n' Roll vol.1-vol.10* Warner Bros., A Time Warner Entertainment Company (以下R&R) からのものである。インタビューの語り手を明示したあとで、“R&R vol.2” というように、資料名と巻数を示す。

(15) 萩原健太の「解説」(1995年8月) R&R vol.2 日本語版より。これは、おおよそ同ビデオのInterview to Sam Philips をなぞったものである。萩原は、同解説で、ロックンロールの名付け親である伝説的DJアラン・フリードにも言及している。「彼はオハイオ州クリーブランドのWJW局で『レコードランデブー』なる番組を担当していたが、51年のある日、地元のレコード店を訪れたとき、白人の若者が黒人リズム&ブルースのレコードを買っている光景を目撃した。それをキッカケに自分の番組でより多くのR&Bをかける決心をし、52年番組タイトルを『ザ・ムーンドック・ロックンロール・ハウス・パーティ』と変更。“R&B” とうたわずに“ロックンロール” という新語を考案したのは、番組で黒人音楽をかけることが白人のリスナーから好意的に受けとめてもらえるかどうか迷った末のことだった。が、結果的には若い白人リスナーからの反応も良好。フリードは独自の荒々しいDJスタイルを駆使し、それまであくまでも傍流でしかなかったR&Bを時代の主流へと送り込んだ。おかげで彼は“ニガー・ラヴァー” と呼ばれ、白人良識派(ママ:伊奈) からかなりの反発を受けた。が、若い白人リスナーは彼を熱狂的に支持。54年、ロックンロール・ステーションへと変身したニューヨークのWINS局は、フリードをメインDJとして迎え入れた。WINSは数ヶ月のうちに全米でトップのAM局へののし上がった」。フリードをまねる白人DJもたくさんあらわれ、ロックンロールは全米に広まっていった。

(16) それぞれは、新しい産業国家の与える「サクセスストーリー」に向かってオーバーヒートすることとまったく無縁であったわけではない。マンハイムについては秋元氏の著作が周到に吟味している。ミルズについては、上の行論で触れたとおりである。ウッドストックジェネレーションとて、ロック音楽やドラッグカルチャーの商業主義的変貌に苦しんできたことはたしかである。また彼らはすべてのバリアから特惠的に自由であったわけではない。

文献：

- 秋元 律郎、1999、『知識社会学と現代——K・マンハイム研究』早稲田大学出版会
- Aptheker, H.、1960、*The World of C. Wright Mills*, Marzani and Munsell =  
1962 陸井三郎訳『ライトミルズの世界』青木書店
- Coser, L.、1962、"Radicalism and Individualism Produced Intense Isolation" *The Justice*. May 3
- Gerth, H.H.、1962、"C.Wright Mills 1916-1962" *Studies on the Left* vol.2 no.3 p.p.7-11
- Gillam, R.、1966、*The Intellectual As Rebel: C. Wright Mills 1916-1946*, Unpublished M.A.essay. Columbia Univ.
- 、1975、"C.Wright Mills and Politics of Truth: *The Power Elite Revised*" *American Quarterly*
- 、1977、"Intellectual and Power" *The Center Magazine*
- 、1978、"Richard Hofstadter, C.Wright Mills and the Critical Ideal" *Scholar*, Win. 1977-1978
- 、1981、"White Collar From Start to Finish" *Theory and Society*, Jan
- Horowitz, I.L.、1964、"The Unfinished Writings of C.Wright Mills" *Studies on the Left*, 3 no4
- 、1983、*C.Wright Mills: An American Utopian*. Free Press
- Horowitz, I.L.ed.、1963、*Power Politics and People*, Oxford Univ. Press =  
1971, 本間康平・青井和夫監訳、『権力・政治・民衆』みすず書房
- 伊奈 正人、1982、「反省と想像力——ライト・ミルズと想像力の知識社会学」未  
公刊修士論文
- 、1991、『ミルズ大衆論の方法とスタイル』勁草書房
- 、1999、『サブカルチャーの社会学』世界思想社
- Lynd, R.S. & Lynd, H.M.、1929、*Middletown*, Harcourt, Brace
- 、1937、*Middletown in Transition*, Harcourt, Brace
- Miller, J.、1987、*Democracy is in the Streets: From Port Huron to the Siege of Chicago*, Simon and Shuster.
- Mills, C.W.、1939、"Language Logic and Culture" *American Sociological*

- Review 5. Oct → Horowitz ed. [1963]
- 、1940、“Methodological Consequences of the Sociology of Knowledge” *American Journal of Sociology* 3  
→ Horowitz ed. [1963]
- 、1941、*Sociological Account of Pragmatism*, Ph.D. Dissertation, Univ of Wisconsin → 1964 Horowitz ed. *Sociology and Pragmatism*, Oxford Univ. Press  
= 1969, 本間康平訳, 『社会学とプラグマティズム』紀伊国屋書店
- 、1951a、*White Collar*, Oxford Univ. Press = 1957 杉政孝訳『ホワイトカラー』東京創元社
- 、1951b、“From the Author” *Book Find News* 5
- 、1959a、“Cultural Apparatus” *The Listener*, vol.LXI. no.1965  
→ Horowitz.I.L.ed. [1963]
- 、1959b、*The Sociological Imagination*, Oxford Univ. Press = 1965, 鈴木広訳『社会学的想像力』紀伊国屋書店
- Press.H. 、1978、*C.Wright Mills*, Twayne Publishers
- 良知 力 、1978、『向こう岸からの世界史——一つの48年革命史論』未来社
- Swados, H.、1963、“C.Wright Mills : A Personal Memoir” *Dissent X* no.1 (Win)
- 高橋 徹 、1979、「解説」『オルテガ・マンハイム 世界の名著68』中央公論社
- Tilman.R. 、1984、*C.Wright Mills: A Native Radical and His American Roots*, The Pennsylvania State Univ. Press
- US Bureau of Census、1910、*Thirteenth Census of the United States* vol III
- 、1920、*Fourteenth Census of the United States* vol III
- 、1930、*Fifteenth Census of the United States* vol III
- Veblen.T. 、1914、*Instinct of Workmanship*, Macmillan
- 、1923、*Absentee Ownership*, Viking
- 山之内 靖、1996、『システム世界の現代的位相』岩波書店